

宇治十帖後半の世界が描き出しているもの

——浮舟の出家を中心に——

尹 勝玫

序

入水事件後、横川の僧都一行に助けられ、蘇生した浮舟の様子が本格的に描かれている手習・夢浮橋巻で、物語が何より重要な問題として扱っているのは、ほかならぬ浮舟の出家についてではないだろうか。浮舟の出家は、妹尼の婿であった中将の懸想が直接的な契機とはなっているものの、その根底には、苦悩を極めた薫、匂宮との関係により生まれた過去のつらい記憶がもたらした浮舟の断固たる意志によるものであった。にもかかわらず、苦悩の果てに行った出家という行為が、実は彼女の生の困難を慰撫し、永続的な救済を保証するものではないという、極めて複雑な問題を内包するかたちで語られている。

また、浮舟の出家を考える際、手習巻で新たに登場した横川の僧都との関係も視野に入れて考えなければならぬ。この横川の僧都という人物は、意識不明で倒れていた浮舟を蘇生させ、自らの手で出家させながら、再び薫と結びつける仲立をし、さらにこの物語の最後のクライマックスを成す夢浮橋巻の場面では、手紙を通して浮舟の将来について助言までする、浮舟の蘇生後の生と深く関わっている存在として描かれている。浮舟に送ったこの僧都の手紙は、還俗を勧奨したものか否か、さまざまな観点から絶えず議論されてきた、この物語の重要な論点の一つでもある^①。

本稿では、手習・夢浮橋巻を中心に、物語が浮舟の出家をいかなる視点で織り成しているのかをみることにする。

それとともに、横川の僧都の消息をめぐるいくつかの論点を整理し、そのうえで、僧都の消息が還俗勸奨か非勸奨かを論ずるよりも、消息の多義性こそが重要であることを論じ、消息の多義性が物語の方法としていかに有効であるかについて考察を加えていくことにする。さらには僧都の消息が物語の終焉とどうつながっているのかといった点についても考えてみたいのである。

一 横川の僧都の登場

浮舟の失踪後、蜻蛉巻においては、残された人々の狼狽や悲しみが描かれ、そしてその後の薫、匂宮の都での華やかな動静が語られている。続く手習巻では、

そのころ横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり（手習⑥二七九）

と、その冒頭に、横川の僧都という新しい人物の登場が告げられている。この新たな登場人物は、当初から「いと尊き人」としてその特徴が紹介されている。物語のなかでは、「山籠りの本意深く」（手習⑥二七九）、「朝廷の召にだに従はず深く籠りたる」（手習⑥二九三）などと、ひたすら修行に専念する僧都の姿が語られており、弟子たちに「天の下の験者」（手習⑥二八四）として敬われ、朝廷側からも、今上

帝の女一宮の病気の際、「なほ僧都参りたまはでは験なしとて、昨日二たびなん召しはべりし」（手習⑥三三三）と、誰よりその験力が認められていることが示されている。さらに、女一宮の病気が僧都の祈祷により平癒した場面では、「いよいよいと尊きものに言ひのしる」（手習⑥三四四）と、その尊さが強調され、後に薫が僧都との親交を求めるきっかけともなった（夢浮橋⑥三七三）。

こうした「いと尊き人」としての横川の僧都のイメージからは、平安中期の高僧として、顕教の碩学として名を列ね、世間にも広くその名が知られていた源信がその造型の準拠であるという指摘が早くからなされてきた。確かに、尼である母と妹が存在するという家族構成の面や母の臨終における逸話^②など、いくつかの状況からその類似点を認めることができ、それらが源信準拠説の有力な根拠として、さらに僧都と源信、両者を関連づけようとする綿密な考察が行われてきたのである。^③一方、物語という虚構の世界の登場人物としてのその独創性を看過してはならないという認識から、物語の横川の僧都に対する見解もさまざまに述べられてきた。たとえば、僧都は、実は世俗性をも合わせ持った「二面性」の人物であるという指摘^④に対し、それは「世俗的にはもつとも理想的な「尊き人」のあり方」であ

つたとの分析がなされ、「いと尊き人」と言われていた僧都の本性について考えさせられる契機となった。また、さまざまな理由で浮舟を助けることに反対していた弟子僧たちに対し、「まことの人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る棄てんこといみじきことなり。……仏のかならず救ひたまふべき際なり」(手習⑥二八四～五)、「いであなかも、大徳たち。我無慚の法師にて、忌むことの中に、破る戒は多からめど、女の筋につけて、まだ譏りとらず、過つことなし。齢六十にあまりて、今さらに人のもどき負はむは、さるべきにこそはあらめ」(手習⑥二九四)と、自分に不利になる可能性をかえりみることなく、人の命を救うことの大切さを断固たる言葉で語る僧都の一貫した姿勢からは、単に頑なに仏道の形式を守ることだけにこだわらぬ、人間的魅力にあふれる「自在な人」^⑥としての僧都像も認められる。

このような過程を経て、「いと尊き人」であり、「自在」な存在である横川の僧都像が構築されるようになった。くわえて、浮舟との関係においては、僧都は浮舟を限りないやさしさで見守る保護者として描かれている。物語のなかでは宇治院の裏庭で倒れていた浮舟を救い出したことを「さるべき契り」(手習⑥二九二)として固く信じ、妹尼からの浮舟の意識回復のための加持の懇請に、何の躊躇もせず、

「山籠りの本意深」かつた自分の意志を断念してまで下山し、その意識を回復させるなど、「御祈禱なども、ねむごろに仕うまつりしを」(手習⑥三三四～五)と、常に浮舟のことを心掛けている僧都の様子が叙述されている。

さらに自ら出家させた浮舟を心配し、「御法服あたらしくしたまへ」とて、綾、羅、絹などいふもの、奉りおきたまふ」(手習⑥三四八)とあるように、物質的な支援までも行っていた僧都は、浮舟に次のような言葉を掛け、励ますのであった。

なにがしはべらん限りは仕うまつりなん。何か思しわづらふべき。常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるる限りなん、ところせく棄てがたく、我も人も思すべかめる。かかる林の中に行ひ勤めたまはん身は、何ごとかは恨めしくも恥づかしくも思すべき。このあらん命は、葉の薄きが如し(手習⑥三四八)

自分が生きている間はすべての世話をするので、浮舟は何の心配もいらないと、出家後の生活を心配または後悔しないように安心させる僧都の頼もしい言葉。しかし、直前の明石中宮との対面の場面では、一世の中に久しうはべるまじきさまに、仏なども教へたまへることどもはべる中に、今年来年過ぐしがたきやうになむはべりければ」(手習⑥三

四四)と、自分の余命が長くないことを語っていた。にもかかわらず、浮舟に対するこのような深い思いやりからは、浮舟のよき理解者としての姿が存分に現れているといえるであろう。

このような横川の僧都像が生まれたことに對し、『源氏物語』の仏教の一つの到達点⁽⁸⁾とも評価されている。浮舟の蘇生後を扱う手習巻は、僧都の紹介から始まるが、これは以後の物語の展開におけるこの人物の重要性を表わすことでもある。蘇生、出家という浮舟の人生の転換点と深く関わりを持つ僧都は、物語の最後まで浮舟の将来と関連し、消息を通して助言するなど大きな役割を果たしている。その助言が浮舟に与えた影響はいかなるものであるか、以後その問題に関して詳しくみることにする。

二 浮舟の出家の行方

横川の僧都の加持により、意識を取り戻した浮舟が発した第一声は「尼になしたまひてよ。さてのみなん生くやうもあるべき」(手習⑥二九八)であった。それは薫と匂宮との間で板挟みになったつらい現状から逃れるため選択した入水も実行できず、この世に蘇ることになった浮舟の心情からすると当然のことであつたかもしれない。しかし、そ

の時は、形ばかりの受戒を受けるにとどまる。その後、妹尼の婿であつた中将の懸想が直接的原因となり、ついに出家を果たしたが、物語は浮舟物語後半部分で、その出家生活の行方についてきびしい視線で問い掛けている。

出家を懇願する浮舟に對し、横川の僧都は、

まだいとい行く先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみちにしかは思したむ。かへりて罪あることなり。思ひたちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いとたいだいしきものになん(手習⑥三三五)

と、若い女性の出家生活がいかに難しいかを語る。僧都だけでなく、中将と対面した妹尼の、浮舟が出家したがっていることに言及した場面での「残り少なき齡の人だに、今はと背きはべる時は、いともの心細くおぼえはべりしものを、世をこめたる盛りにては、つひにいかがとなん見たまへはべる」(手習⑥三二五)という言葉や、出家した浮舟に對する「かかる身にては、すすめきこえんこそはと思ひなしはべれど、残り多かる御身を、いかで経たまはむとすらむ」(手習⑥三四三)という言葉からも、若い盛りの女の身で尼の生涯を貫くことのきびしさが述べられている。⁽⁹⁾

同様の考え方は『源氏物語』全体を通じてもしばしばみ

られる。帚木卷の兩世の品定めの場合で左馬頭が語った女の例でも、「思ひ立つほどはいと心澄めるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず、……仏もなかなか心ぎたなしと見たまひつべし。濁りにしめるほどよりも、なま浮かびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞおぼゆる」(帚木①六六・七七)と、出家を決意した当時は、俗世を振り返ってみることは夢にも思わぬほど、断固たる気持で臨むのであるが、実際、その出家生活は予期せぬさまざまな試練の連続で、それを貫くことがいかに大変であるかを示している。出家を願う女三宮を前にし、朱雀院も「さる御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりて事の乱れあり、世の人に譏らるるやうありぬべきことになん、なほ憚りぬべき」(柏木④三〇五)と、やはり同じ趣旨を説いている。

平安時代において、出家は崇高な行為として認められていたが、それがけつして平坦な道ではないことも、当時の記録類などに記されている。たとえば、『権記』長保三年正月七日条には、出家を志し、すでに出家していた父藤原義懷のもとを訪れた成房に対し、義懷が「出家の志は妨ぐべからざる所也。但し法師の行ひは、始終甚だ難し。(中略)近代、俗脱の初発心の時、鬢髪を剃除するの輩有りと雖も、

信心已に退き、初心の如くに非ず、空しく懈怠を成し、還りて謗毀を招く。自他の罪累、無益第一の事也」と諫めている。この義懷の言葉からは、男性でさえ、その出家生活の持続が困難であることがうかがえる。女性の場合、臨終の際や延命のための老年女性の出家は比較的は認められているが、若い女性の場合は、出家という行為自体がむしろ忌まれており、物の怪に憑かれたしわざと考えられもしたようである。⁽¹⁰⁾浮舟が出家を願った時の、僧都の「あやしく、かかる容貌ありさまを、なぞて身をいとはしく思ひはじめたまひけん、物の怪もさこそ言ふなりしか、と思ひあはするに」(手習⑥三三六)という思いは、確かに当時の通念とも通じるものである。

物語が浮舟物語の後半部分で追求しているのは、こうした至難の出家生活を、はたして浮舟が最後まで成し遂げることができるかということである。そしてこの問題は浮舟の造型とも深く関わっている。

浮舟物語を通し、浮舟は「さすらひ」の存在として造型されている。東国、京、宇治、小野という物理的な空間でさすらうだけでなく、物語には、彼女自ら「橘の小鳥の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ」(浮舟⑥一五二)という歌を通して、「さすらひ」の存在としての自分の人生

を認めているほか、浮舟がさすらわざるを得ない運命を背負っていることは蘇生後の場面に多く暗示されている。

浮舟の出家のことを知り、突然の出来事に呆然たる気持を隠せない中將から、浮舟宛に文が届く。中將はその手紙で、「岸とほく漕ぎはなるらむあま舟にのりおくれじといそがるるかな」（手習⑥三四二）と、自分も浮舟のあとを追いつ、出家したいという心情を表わしたが、その返歌に、浮舟は「心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木を」（手習⑥三四二）と、自分は「行く方も知らぬ」存在であると語っている。出家はしたもの、その行方の方からない浮舟のこれからの人生が、ここに予兆されているとみることができよう。さらに出家の場面で、僧都が唱えている「流転三界中」という言葉にも注目する必要がある。これは「流転三界中 恩愛不能脱 棄恩人無為 真実報恩者^①」という、剃髪の儀式の際に唱える文句の一部であるが、この偈文を唱えるのを境として、父母に別れを告げ、俗世から離脱するのであった。そのなかでも、我々は永久に三界——俗界・色界・無色界、つまり我々衆生の生死輪廻してゆく世界——のうちを流転しているという意味を表わす「流転三界中」の句を物語が挙げていることは重要で、やはり出家後も「流転」をまぬかれない浮舟の生を象徴的に

表わしていると思われる。

また、浮舟物語前半で、「あてになまめいたる」女君——高貴で美しい浮舟像が強調されていたが、出家と前後して、浮舟のすぐれた美貌の描写が反復して描かれている。尼姿とはいえ、ことさらに若々しく、美しく華やかな浮舟の姿が、小野を訪れた中將の目を通して次のように語られている。

ことさらにも人に見せまほしきさましてぞおはする。
薄鈍色の綾、中には萱草など澄みたる色を着て、いとささやかに、様体をかしく、いまめきたる容貌に、髪は五重の扇を広げたるやうにこちたき末つきなり。こまかにうつくしき面様の、化粧をいみじくしたらむやうに、赤くにほひたり。行ひなどをしたまふも、なほ数珠は近き几帳にうち懸けて、経に心を入れて読みたまへるさま、絵にも描かまほし。（手習⑥三五〇—二）

こうした浮舟の姿を見た中將は、彼女への執着を諦めるどころか、「尼なりとも、かかるさましたらむ人はうたてもおほえじ、など、なかなか見どころまさりて心苦しかるべきを、忍びたるさまに、なほ語らひとりてん」（手習⑥三五二）、「行く末の御後見は、命も知りがたく頼もしげなき身なれど、さ聞こそそめはべりなばさらに変りはべらじ」（手

習⑥三五三」とあるように、ますます執拗に親交を求めようとしている。浮舟はまったく意図しなかったにせよ、その若さと美貌が彼女の出家生活の妨げの原因となり得ることが、見てきたような記述から読みとることができると思われる¹²。さらに、浮舟の境遇を案じた横川の僧都が口ずさんだ「松門に暁到りて月徘徊す」(手習⑥三四九)という「陵園妾」の詩句の背景と照らし合わせて考えてみても、これからの浮舟の人生は、出家したとはいえ、その出家生活から安定を得ることができず、またまさすらう運命にさらされる可能性が極めて高いことがじゅうぶん予想されるであろう。

三 横川の僧都の消息の意味するもの

出家した浮舟は、一見「この本意のことしたまひて後より、すこしはればれしうなりて、尼君とはかく戯れもしかはし、碁打ちなどしてぞ明かし暮らしたまふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり、こと法文なども、いと多く読みたまふ」(手習⑥三五四)とあるように、穏やかな出家生活を送っているかのようにみえる。しかし、紀伊守の登場により、そういった落ち着いた物語の雰囲気は急変する。いよいよ薫は浮舟の生存を知り、その真相を確認する

ため、横川に赴き、僧都と対面するなど、物語は終結に向かつて緊迫した動きをみせる。

薫の浮舟との再会の仲介の要請に、僧都は最初はそれを拒んだが、重ねての懇願に、結局浮舟宛の手紙を書き、それを浮舟の異父弟である小君に持たせた。その消息が、その解釈をめぐって長年議論されてきた次の文面である。

今朝、ここに、大将殿のものしたまひて、御ありさま尋ね問ひたまふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえはべりぬ。御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山がつの中に出家したまへること、かへりては、仏の責そふべきことなるをなん、うけたまはり驚きはべる。いかがはせん。もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなん。……(夢浮橋⑥三八六―七)

先行論でさまざまな見地に基づき、研究されてきた部分ではあるが、ここで簡略にその意味について考えてみることにする。この消息でいちばん問題とされている箇所が、「もとの御契り過ちたまはで……」云々以下のところである。『もとの御契り』に対し、僧都との因縁¹³、仏との縁という説¹⁵もあったが、現在はおおむね薫との縁として解釈

され、もう議論が尽くされているように思われる。また、非還俗勸奨説では、「一日の出家の功德ははかりなきものなれば」の部分の典拠とされる『心地観經』の經文を挙げ、この部分は出家生活の礼賛の語であるとし、男女の結婚などのことを仲介することを禁じた小乗戒の比丘戒第二類、僧残法第五などと合わせて考えても、還俗勸奨と解する根拠にはならないと主張してきた。⁽¹⁷⁾しかし、『觀無量壽經』や『涅槃經』壽命品の「若し出家の禁戒を毀る者有らば、我当に罷めて還俗し策使すべし」(『大正新修大藏經』卷十二・三六七頁)という經文からすると、出家者としての戒律を守らないよりは、還俗する方がましであるとされ、還俗が必ずしも破戒ではないことが語られている。こうした例などを根拠に、還俗勸奨説側では、この手紙は僧都が浮舟に還俗を勸奨したものとして解している。空海の詩「還俗の人を見る作」では、「昔日は頭を剃り今は髪を長くす／出家と二種の心惟れ重なる／紅花綠実一株の物／君見よ春秋顔色同じなりやと／世理の無常は人も此の如し／心縁動ぜざれば大道に通す／長江萬里相答す／爾りと雖も身を處く」と虚空の如し……⁽²⁰⁾と、出家と在家とは、その形は変わっているものの、心は同じであると詠まれており、必ずしも還俗が禁じられているのではないことがうかがえる。

さらに、僧都が消息を通して指示している内容について、それが還俗して薫と元通りの夫婦関係に戻ることを示したものとする説⁽²¹⁾、あるいは、還俗して薫のもとで在家の「菩薩」としての道を選ぶことを助言したとする説や、還俗せず、薫の庇護下で出家生活を送ることを表わしているとするなど、これまた見解の相違により、意見が分かれている。確かに僧都の消息の文脈は、還俗を勧めているかのように読みとれるところもある。薫と対面した僧都は、薫の態度から浮舟への感情を察知し、浮舟を軽率に出家させた自分の行動を後悔した。さらにこのまま浮舟が薫と再会する場合、そうした薫の感情が浮舟の心を乱し、はてには彼女が尼のまま不淫戒を犯してしまう可能性の生じることをも懸念した。そのような僧都の思いからすると、浮舟に罪を犯せないため、還俗して薫と逢うことを望んでいたのかもしれない。しかし、ここで一つ注意すべきことがある。この僧都の消息について、増田繁夫氏が「この手紙を書いた僧都の真意がこの手紙に十分表れてゐるとは考へにくい」と評しているように、ただここには、浮舟に対し、「(薫との)もとからのご縁を損なうことのないように、その愛執の罪が消えるようにしてあげて、一日でも出家したことの功德は無量のものであるから、やはり今まで同様にその功德を

頼りなさい」と書いてあるだけで、その文面の内容は極めて抽象的で、具体的に何を意味するかが明確に現れていないのではないだろうか。はたして僧都は、浮舟と薫のものと関係を重視し、愛執の罪を晴らすため浮舟に薫のもとに戻することを勧めているのか、それとも僧都本来の立場を重んじ、浮舟に還俗せず、出家生活を送ることを指示したのか。この手紙の文句を読む限りは、僧都がこの消息を通して伝えたかった内容がはっきり提示されているとはいい難い。つまり、この消息は、その意味が還俗勸奨か否か、あるいは浮舟の身の処し方への助言の具体的な内容を明確に決めることができず、読む側がいかにかに受けとめるかにより、いろいろ解釈される余地が含まれている、いわゆる多義性が存在するものとして認識すべきである。⁽²⁵⁾そのため、浮舟には僧都の本心が伝えられ難い構図となっている。これまでに横川の僧都の消息の意味をめぐって絶えず議論され、さまざまな見解のもとで試案がなされてきたうえで、いまだなおその意味について決着がついていないこと自体が、この手紙のもつ多義性をもっともよく物語っているのではないだろうか。

このように『源氏物語』には、言葉の解釈を一義的に決められないために、作中人物たちが、その多義的な言葉に

対し、それぞれ異なる理解と思惑を示す場面がある。そのような場面では多義性がもたらす錯綜する作中人物の思惑によって物語が展開されていく。すなわち、この多義性というのは、この物語の作者が物語を展開するにあたり、しばしば用いている方法の一つなのである。ここでこの消息を還俗勸奨か、非還俗勸奨かという二者択一の問題として単純化してしまうと、この消息のもつ本来の重要な意味を見失ってしまうと思われる。問題とすべきは、なぜこうした状況で多義的に捉えられる消息が用意されたか、そしてそれがいかなる効果をもたらすかということであろう。

四 多義性の意義

宇治十帖前半、薫と大君の恋の物語の本格的なきっかけとなったのが、八の宮の遺言であった。宮の遺言にもまた多義性が存在し、姫君の結婚問題をめぐって、各登場人物は自分の立場にあわせて遺言の意味を主観的に受けとめ、それを利用することにより、人物同士のいろいろな思惑のもとに物語が展開されていくのであった。⁽²⁶⁾物語の終焉の直前の場面で、またも横川の僧都の消息という、その意味が明確でないため、さまざまに解釈される余地のある素材が用いられている。このように、宇治十帖においては、登場

人物の多義性を含んだ言葉が物語の前半と後半に配置され、いわゆる首尾呼応の構図を成している。これは単なる偶然ではなく、そこには作者のある種の意図があったはずであろう。ここでは僧都の消息に多義性という方法が用いられたことの意義や、そこから垣間見られる物語の論理について考えてみたい。

僧都の手紙に接した浮舟は、ただ「夢のやうなり」と思い、「ほろほろと泣かれる」（夢浮橋⑥三八八）という反応を示した。手習巻の後半、物語の情勢は急激に変わり、夢浮橋巻に入ってから、はたして薫は浮舟と再会できるか、これからの浮舟の運命はどうなるのかという物語の緊張感が最高潮に達している瞬間に届いた僧都の文。その手紙に対し、浮舟がいかに受けとめたかは定かではないが、畢竟彼女も自分の境遇にあわせてその意味を受けとめたに違いない。

男女関係のすべての煩わしさを断ち切るために果たした出家。出家後の、「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる」、「限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな」（手習⑥三四一）という手習い歌や、「（僧都ガ）「流転三界中」など言ふにも、断ちててしものをと思ひ出づるも、さすがなりけり。……世

に経べきものとは思ひかけずなりぬるこそはいとめでたきことなれと、胸のあきたる心地したまひける」（手習⑥三三九・四〇）という文面からは、彼女の求道への信念がいかに真摯、かつ確固たるものであるかが如実に表れている。さらに薫に対する認識も、入水事件前とは変わっていて（手習⑥三三一―三二）、薫のことを恋しく思っているが、男女関係の次元を超えた、自身の過去を顧みることにより自然と浮かび上がってくる、はるかな懐かしさのようなものでもあった。

そのような浮舟にとって、真意もはつきりされないまま、「もとの御契り過ちたまはで……」云々と記されているこの消息には、ただ迷うしかなかった。薫との元の関係に戻り、妻となることを指示しているのか、あるいは還俗して「菩薩」として過ごすことへの助言であるか。それとも還俗せず、しかも薫の元に帰って出家生活を送ることを意味しているのか、このまま小野で出家生活を続けながら、薫の愛執を晴らすための仏道に邁進することを勧めているのか。ここには何一つ明らかになっていない。一体我が身はどうすべきであるか。このように、僧都の消息は、物語の最後のクライマックスの場面においてもなお、浮舟を翻弄し、劇的緊張感をますます高めていく役割を果たしている。

と同時に、いくら浮舟が頑なな態度を貫き、道心に専念しようとしても、それはけつして容易ではない、さまざまな苦難を耐えねばならぬ艱難の道であることを改めて表わしているのである。

五 齟齬する関係性

さて、この僧都の消息はまた、この物語が追い求め続けていた主題の一つである、他者の了解不可能性を浮き彫りにするものでもあった。第二部の光源氏と紫の上の関係がそのよい例であるが、互に心が惹かれあいながらも、相手をじゅんぶんに把握し得ない側面があるがゆえに、二人の心に隔てが発生し、結局二人は他人であるほかないというこの論理。無論、男女関係において主に用いられる方法ではあるが、そうした関係以外の他人同士においても、同じく了解不可能性が生じることを僧都の消息は表わしている。

僧都が浮舟にこの消息を送るまでの経緯をみてみよう。僧都のもとを訪れた薫から浮舟の境遇について聞いた僧都は、諸事情も知らず、性急に彼女を出家させたことについて、「(薫ガ浮舟ノコトヲ) かく思しけることをこの世には亡き人と同じやうになしたることと、過ちしたる心地して罪

深ければ」(夢浮橋⑥三七八)、「いとほしく、罪得ぬべきわざにもあるべきかな」(夢浮橋⑥三七九〜八〇)と、驚きを隠せず、深々と自分の行動を反省していた。しかし、「いと便なきしるべとは思すとも、かの坂本に降りたまへ」(夢浮橋⑥三七九)と、浮舟との仲介を求める薫の依頼に対しては、それを拒否した。そのうえ、せめて「御文一行賜へ」(夢浮橋⑥三八〇)とする薫の要請も、「なにがし、このしるべにて、かならず罪得はべりなん」(夢浮橋⑥三八〇)と、僧侶である自分の立場から男女関係の「しるべ」役を担うことは罪となるとそれを拒み、その代わり薫が直接浮舟のもとを訪ねるよう勧める。しかし、それでも諦めず、浮舟の異父弟の小君を媒介とする薫の願いに、やっと承諾し手紙を出したわけで、実は僧都自身もその「しるべ」となり、手紙を送ることに迷っていたのである。

また、物語のなかで僧都は浮舟の保護者を自任し、彼女のよき理解者として描かれているが、僧都にとって浮舟は、まったくその素性の分からない未知の人であった。手紙のなかで、僧都は「御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山がつの中に出家したまへること、かへりては、仏の責そふべきことなるをなん」と、浮舟を大事に思っている薫との深い仲を背き、浮舟が出家したことは、かえっ

て仏の叱りを受けることになるかと語っているが、それはあくまで薫から提供されたわずかな情報に基づいた判断であり、浮舟がいかなる覚悟で出家を果たし、その出家生活を守り続けるため全力を尽くしてきたかが、まったく理解されていない。浮舟の身の上を案じ、彼女の将来をよい方向に導くためという善意に基づいて送ったはずの手紙が、実は浮舟の心情も事情もほとんど知らぬままのものであったという皮肉さがそこに存在する。そういう状況から発せられたメッセージの、しかもはっきりした意味が提示されていないアドバイスが、頑なな態度で世俗のことを顧みることとは絶対すまいと決めていた浮舟にいかなる影響力を発揮することができるであろうか。

一方、小君は横川の僧都の消息だけでなく、薫の浮舟宛の手紙も持参して小野に訪れたが、この薫からの手紙にも、同じ方法が用いられている。

さらに聞こえん方なく、さまざまに罪重き御心をば、僧都に思ひゆるしきこえて、今は、いかで、あさましかりし世の夢語をだにと急がる心の、我ながらもどかしきになん。まして、人目はいかに。と、書きもやりたまはず。

法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみ

まどふかな

この人は、見や忘れたまひぬらむ。ここには、行く方なき御形見に見るものにてなん。(夢浮橋⑥三九二)

薫は手紙のなかで「法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな」という歌を詠んでいた。仏道の師として横川の僧都を訪ねたはずの私が、その導きで、いつの間にか思いもかけぬあなたとの恋の道に踏み迷ってしまったと、この歌を通して浮舟に訴えかけている。ただし、この歌には単にそういう意味だけでなく、あたかも今までの薫の人生そのものが歌いあげられているかのように思われる。浮舟との再会を切に願って送ったその手紙は、薫の浮舟に対する誠意はこめられてはいるものの、恋慕の感情が現れているわけではなく、ただかつての法の道への高き志が、やがては思いかけぬ愛欲の虜になってしまったと、まるで橋姫巻以来の薫の一生を凝縮しているような意味を成している。

薫が浮舟に愛情を感じていたのは確かである。紀伊守が伝えた、浮舟の一周忌を前にして宇治を訪れ、浮舟の死を惜しみ、その悲しみの末、泣き崩れる薫の姿からは浮舟への感情がじゅうぶん読みとれるのである。しかし、その一方、薫は浮舟との関係に対し、常に世間体を気にしていた

のも事実である。右の手紙の文面からもそうした薫の思いがうかがわれる。横川を訪れ、僧都と対面した場面でも「むげに亡き人と思ひはてにし人を、さは、まことにあるにこそはと思すほど、夢の心地してあさましければ、つつみもあへず涙ぐまれたまひぬるを、僧都の恥づかしげなるに、かくまで見ゆべきことかはと思ひ返して、つれなくもてなしたまへど」(夢浮橋⑥三七八)とあるように、浮舟の生存を喜びながらも、僧都の視線を意識して、自らの気持を隠し、何気なく行動するという、相反する態度をみせていた。そのような複雑な感情が、浮舟との再会を求めつつも、そのせいで自分の志が破られ、恋路に惑ってしまったという内容の歌として現われたのであろう。また、僧都と薫からそれぞれ送られた手紙に接した浮舟が薫ではなく、ひたすら母を思い出していることは、浮舟にとって薫との関係には何の未練もなく、もはや薫は恋慕の対象ではないことを記しているのではないだろうか。このように二人の感情は齟齬きたしており、その時送られてきた薫の、ひたすら我が身を顧みるような内容の歌に、浮舟の心が動かされるとは、到底考えられないのである。さらに、返事を拒否した浮舟に対し、薫は他の男の存在を疑った。浮舟に愛情を抱いていながらも、彼女がいかなる気持で自分への返事を拒

んだかが薫にはまったく理解できず、そのため、むしろ浮舟のことを見誤っている。薫と浮舟の心が最後まで隔たつたまま、物語はその終焉を迎える。

結び

断固たる態度で出家生活を成し遂げようとする浮舟。彼女の将来の行方を案じる僧都。また浮舟との再会を求める薫。このように、浮舟の将来について三人は別々の思惑を持っていた。宇治十帖後半の世界は、主に浮舟の出家問題をその軸として、こうした三人の思惑を中心に、多様な物語の方法が用いられながら展開していく。

煩惱を断ち切るため行った出家という行為も、実はさまざまな要因により揺さぶられるものであり、出家さえも慰安や救済をもたらしものではないということを物語は最後まで丹念に描いている。そのなかで、僧都の手紙はその意味が一義的に決定できないために、浮舟を戸惑わせるものでもしかなかった。そもそも、僧都からの消息にしろ、薫からの手紙にしろ、浮舟への善意がこめられているのではあるが、浮舟の立場や実情に対するじゅうぶんな理解が欠けているため、彼女にいかなる説得力も持たぬものとなってしまう、かえって浮舟を迷わせ、苦しめている。また、こ

の手紙およびそこから垣間見られる三人それぞれの人間関係からは、物語は唐突に終わってしまったが、その後、浮舟が僧都の助言を受け入れるはずもなく、仮に薫のもとに帰ったとしても、そこに幸せな未来が待つてはいないことが密かに暗示されているかのように思われるのである。

【注】

- (1) 『岷江入楚』の三条西実枝（箋）以来、この手紙は還俗勸奨の意味として理解されてきたが、多屋頼俊氏により還俗を勧めたものではないという見解が示されてから（多屋頼俊「宇治十帖の結末」『源氏物語の思想』法蔵館、一九五二、初出は一九四一）、それぞれの観点により、多様な見方、――還俗勸奨説、非勸奨説の他、その意味の曖昧さを指摘する意見（山口昌男「源氏物語夢浮橋巻の文芸構造――愛執の罪を中心として――」『日本文芸研究』一九八〇・三、渡会敦幸「救済のゆくえ――横川僧都の消息をめぐって――」伊井春樹編『古代中世文学研究論集』第一集、和泉書院、一九九六、あるいは浮舟の身柄を薫にゆだねたという説（三角洋一「横川僧都」『国文学』一九九一・五）など――が唱えられてきた。現在では一般的に勸奨説として解釈しているのであるが、

まだ決着がついたとはいえない状態である。そのうえ、その文面が意味する浮舟の身の処し方の具体的な方法についても、見地の相違により意見が分かれている。

- (2) 『今昔物語集』巻十五三十九話には、山籠りの修行中、母の危篤を知り、修行をやめて下山し、母に会いに行く源信の逸話が記されているが、手習巻での横川の僧都の境遇との類似性が指摘される。

- (3) 中哲裕「横川の僧都――その思想と行動をめぐって――」（『文学・語学』一九七八・十二）、山本利達「横川僧都」（『源氏物語攷』塙書房、一九九五）など。

- (4) 岩瀬法雲「横川の僧都の二面性――源氏物語における人物造型について――」（『源氏物語と仏教思想』笠間書院、一九七二）。

- (5) 今西祐一郎「横川僧都」小論（『論集 日本文学・日本語 2 中古』角川書店、一九七七）。丸山キヨ子氏は「尊し」という言葉からは、「権勢榮譽に遠く身を置く、修行の功すぐれた徳高い出家者としてのイメージが浮かび上がる」と指摘したうえで、僧都もそうしたイメージで考えるべきであると述べている（丸山キヨ子「僧侶像」『源氏物語の仏教――その宗教性の考察と源泉となる教説についての探究』創文社、一九八五）。

- (6) 清水好子「横川の僧都――自在の人――」（『源氏の女君』塙書房、

一九六七。

- (7) 女一宮の加持祈祷のため下山した際、浮舟と対面した場面にも、「不意にて見たてまつりそめてしも、さるべき昔の契りありけるにこそと思ひたまへて」(手習⑥三三四)と、その出会いを「さるべき契り」として認識している僧都の思惟が語られている。

- (8) 丸山キヨ子「横川の僧都(一)」(注5前掲書)。

- (9) 夢浮橋巻で薫と対面し、浮舟との諸事情について聞いた後も、僧都は「かたちを変へ、世を背きにきとおぼえたれど、髪、鬢を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらん、いとほしく、罪えぬべきわざにもあるべきかな」(夢浮橋⑥三七九、八〇)と、やはり同様の考え方を示している。

- (10) 勝浦令子「尼削ぎ致―髪型からみた尼の存在形態―」(大隈和雄・西口順子編『尼と尼寺』シリーズ女性と仏教1、平凡社、一九八九)。

- (11) 『法苑珠林』鬘髮部第三(『大正新修大藏經』卷五十三・四四八頁)。

- (12) その他にも、「かかる御容貌やつしたまひて、悔いたまふな」(手習⑥三三九)、「げにぞ、容貌はいとうるはしくけうらにて、行ひやつれんもいとほしげになむはべりし」(手習⑥三

四六)など、浮舟の美貌が多く語られている。

- (13) 「陵園妾」とは、讒言によって罪を得、御陵の守役として生涯幽閉された宮女の悲惨な境遇を憐れんで詠んだ、白居易の新樂府に見える三十二句の長詩である。手習巻における「陵園妾」引用の意味については、藤原克己氏の諸論文に詳しく考察されている(『源氏物語の文体・表現と漢詩文』『源氏物語研究集成』第三巻、風間書房、一九九八、「物語の終焉と横川の僧都」永井和子編『源氏物語へ 源氏物語から』笠間書院、二〇〇七)。

- (14) 門前眞一「宇治十帖の構成と浮舟の還俗問題」(『源氏物語新見』門前眞一教授還暦記念会、一九六五、松村誠一「もとの御契り」(浮舟)は「さるべき昔の契り」(僧都)」(『成蹊国文』十八、一九八五)など。

- (15) 阿部俊子「浮舟の出家」(『源氏物語と和歌 研究と資料Ⅱ』武蔵野書院、一九八二)。

- (16) 『栄花物語』(『新編日本古典文学全集』小学館)では、「一日にても出家の功德世に勝れめでたかななるものを」(ころものたま③四〇)と、藤原公任が出家を決意するところに、この言葉が引用されている。

- (17) 注14前掲門前論文。

- (18) 洲江文也氏は、『観無量寿経』の「(中品中生)^{ちゅうばんちゅうしやう}」とは、も

し衆生ありて、もしは一日一夜、八戒斎を受持し、もしは一日一夜、沙弥戒しゃみかいを持ち、もしは一日一夜、具足戒ぐそくかいを持ちて、威儀欠くることなければ、この功德をもつて、廻向して極楽国に生まれんと願求す」(『大正新修大藏經』卷三十七・二四五頁)をこの部分の出典とすれば、これは一日一夜の短い出家でも有難い功德があることを意味する「出家功德經」であり、還俗勸奨の趣旨として理解しても不審ではないと説いている(瀧江文也「横川僧都と浮舟」『源氏物語の思想的美質』桜楓社、一九七八)。

(19) 丸山キヨ子「横川の僧都(二)」(注5前掲書)。

(20) 「統遍照發揮性靈集補闕抄卷第十」(『三教指帰 性靈集』、『日本文学大系』、岩波書店)。

(21) 山本利達氏は、その意味に対し、『岷江入楚』の「箋」説に従い、「還俗して薫と元通り夫婦となり、薫の愛執の罪を晴らしてあげなさい」という還俗勸奨の言葉として受け取られて来た」と説明している(山本利達「横川僧都の心情(二)」、注3前掲書)。

(22) 注19前掲丸山論文、佐藤勢紀子「横川僧都の消息と『大日経義釈』——還俗勸奨を支える論理——」(『日本文学』二〇〇〇・六)。

(23) 注5前掲今西論文。

(24) 増田繁夫「浮舟の出家」(『源氏物語と和歌 研究と資料』武蔵野書院、一九七四)。増田氏は、その理由についてこの手紙は薫も読むことを前提として書かれたものであるため、「僧都の真意そのままだがそこに示されてゐるとは限らない」と述べている。

(25) 野口武彦氏は「僧都消息には、詠み方のアングルしだいでいくつもの意味を持つ情報量が収められている」と説明している(野口武彦「源氏」はいかにして物語となりしか—石山と横川と宇治—」『季刊jinhiko』一九九二・四)。

(26) 拙稿「八の宮の遺言の多義性—呪縛される遺言から利用される遺言へ—」(『国語と国文学』二〇〇九・一)参照。

(27) この歌の意味に関しては、今井上氏の論文に詳しく考察されている(今井上「踏み惑う薫と夢浮橋—宇治十帖の終末についての試論—」『源氏物語 表現の理路』笠間書院、二〇〇八)。

『源氏物語』の本文の引用は、『新編日本文学全集』(小学館)による。引用部分の括弧内の表記は巻名、巻数、頁数を表す。なお、引用に際しては表記を私に改めたところがある。